太平記絵巻の制作工程について

色注の考察を中心に

江村知子

The Process of Making the *Taiheiki* Picture Scrolls

EMURA Tomoko

はじめに
❶「太平記絵巻」の色注と指示書きについて
❷「太平記絵巻」の制作工程と制作背景について
おわりに

[論文要旨]

国立歴史民俗博物館所蔵「太平記絵詞」（上・中・下）は、埼玉県立歴史と民俗の博物館所蔵「太平記絵巻」（第一、二、六、七、十巻）、ニューヨーク・パブリック・ライブラリー、スペンサー・コレクションの「太平記絵巻」（第三、八巻）と本来一具の作品で、同絵巻の第五、十一、十二巻に該当し、江戸時代十七世紀の制作と考えられている。『太平記』は南北朝の争乱を題材とした四十巻からなる軍記物語で、本稿で扱う「太平記絵巻」は全十二巻で構成され、現存最古の絵画化された作例として知られる。その画面の構図やモティーフは先行する時代の絵巻物に拠っていることが指摘されており、特に「俵藤太絵巻」は多くの共通点を見出すことができる。「太平記絵巻」の作者は海北友雪（一五九八～一六七七）とする説が有力となっているが、確かな証左は得られていない。

本稿では現存する「太平記絵巻」の十巻全体を通じて、色注や各種の指示書きが見られることを紹介し、その制作工程について考察する。具体的には緑色を示す「六」、青色を示す「こん」、赤色を示す「しゆ」、橙色を示す「たん」の四種類の色についての指示書きや、畳や縁などの調度類についての墨書が数多く確認された。こうした周到な指図の痕跡から、この「太平記絵巻」には粉本が存在し、複数の絵師によって制作されたことを明らかにした。また絵の中に詞書が書き込まれ、本来重要であるはずの詞書が絵に対して従属的すぎる点、また文献資料で確認できる、三十巻本の海北友雪の筆による「太平記絵巻」がかつて存在していたという記述から、本来は詞書と絵とそれぞれが独立しており、現存する「太平記絵巻」はその省略形として制作されたものである可能性について指摘した。

【キーワード】海北友雪、俵藤太絵巻、軍記物